

---

# そんな出会いで恋をしたかった。

たこぴー

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

そんな出会いで恋をしたかった。

### 【Zコード】

N9215Y

### 【作者名】

たこぴー

### 【あらすじ】

僕は恋をしないと決めた……、そのはずだった。でもあの日から僕は恋をしたのかもしれない。

## プロローグ（前書き）

こんばんは、最近もう一つの小説が上げるのが遅れてこるので、もともと書いていた小説をあげてみます。

## プロローグ

8年前：

「二人の子供が話し合っている、そのうちの一人は僕だった。  
「ねえ、約束だよ。ずっと一緒にいてね。」

今となつてはあだ名しか思い出せない少女は言った。

「うん！ずっと一緒にいようね！」

まだ幼い僕は笑顔で返事をした。

「約束だよ。」

少女はピンと小指をたてた手を僕に向けた。

「うん。」

僕は自分の手を出してその小指を少女の小指に絡めた。

「指切りげんまん、嘘ついたら針千本の一ます指切つた！」「

「これでずっと一緒に望む！」

「そうだね、このちゃん！」

けどこの約束は僕く消えた。

その日の夕方はいつも以上に騒がしかつた。

けたましいサイレンの音、野次馬の声が僕の周りで聞こえた。

「女の子が轢かれたらしいわよ。」

「あら本当に、まったく、かわいそうとしか言いようがないわね。」

「ねえ、あそこにいる子轢かれた子の知り合いかしら？」

周りで僕の事を言つている人もいた、なかには心配して話しかけてきた人もいた、けどそのときの僕は何の反応も示さなかつた。

なぜなら、

「うつ…、ひつ…。ああああん！」

泣いていたから。

そのとき自分の一番大切な人がいなくなつてしまい僕の心の中に  
はとても大きな喪失感ができた。そしてその喪失感はこのちゃ  
ん以外の女の子と恋をしないという決意で埋めた。

一ヶ月後このちゃんの家族は引っ越しした。

ジリリリリ！とつのさく目覚まし時計が鳴り響いた。

「朝から嫌な事を思い出したな。」

僕は咳きながらベッドから出て、支度をして入学式に向かった。

## プロローグ（後書き）

こんにちは、元から書いていたやつを上げました。  
応援していただけすると嬉しいです。  
できたらもう一つの作品、WSP 一人の能力者もよろしくお願ひ  
します。

## 入学式が最悪の日になつた（前書き）

いよいよちは、少しずつあげていきます。

## 入学式が最悪の日になつた

綺麗な桜の中で一人でたたずんでいる少女がいた。

その少女を見ているのは僕こと高見望、今年、私立白崎学園に今日入学した。

てか何で僕は説明口調なんだ？まつ、いいか。

そういうえば今は春、入学式等がある出会いの季節期待に胸を膨らませるはずだ、普通の人は。

でも僕は普通の人だけど特に期待はしていない。えつ？なぜかつて？なぜかと云うと今までの関係をほぼゼロにして新しく関係をつくらないといけないなんて大変で仕方がない。でも関係をちゃんと築かないと社会では生きていけないから、ちゃんと関係は築くけど。変な人がいないのを願つておこう。

ところであそこにいる女の子は何をしているのだろう？  
僕は不思議に思つて女の子を見た、すると。

「何かしら？」

少し棘のある声で言われた。

気づくのが早いな、と思いながら僕は少女を見た。

「！？」

少女を見た僕は驚愕した。

「綺麗だ…。」

そう、その少女は僕がうつかり口に出してしまったくらいの美少女だった。よほど手入れをしているのか、あまりに綺麗すぎる薦色のような髪。

白魚と比べてしまふのをためらうぐらいいの肌。

極めつけは、誰もが吸い込まれそうな瞳。

どんな人間が見ても必ず見とれてしまうであろう少女だった。

「何を言つているの？」少し引かれぎみで言われた。本当のこと言つただけなのにショックだ。

「『めん、つこうかり本当の』ことを口走ってしまっただけなんだ！」

「何、一体なんなの？」

さりに引かれた、ビリジョウかと僕は必死に考えた。この子の特徴は…、

「急に視姦をしだすなんて、もしかして変態？」「えつ！？いや違うよ、誤解だよ…」

確かに全身を見たのは悪かつたとは思うナゾ、一きなり変態となるて呼ぶのは酷すぎる。

「おつとじめんよ。」

後ろから誰かが急にぶつかってきた。

「わっ！」

そのまま僕は押された衝撃で倒れてしまった。  
それと倒れた方向が非常にまずかった。

「…。」

そう、僕は少女を押し倒す形になつたわけであつた。

「あの、退いてもらえませんか？」

僕は少女に言われた通り少女の上から離れた。

「すみませんでした！」 僕はそのままその場で土下座をした。

「ふん！」

名前も知らない少女は怒つたままその場を立ち去つた。

「うーん、押し倒すつもりは1ミクロもなかつたのに…。」

「まあ、しかたねえよ。事故だしな。」

急に後ろから話しかけられた。

「あつなんだ、島屋か…。」

僕は嘆息してしまつた。「なんだとは酷いな、長い付き合いのくせに。」 僕に話しかけたのは縞里隆也実家が不動産業やっている理由で島屋。

「漢字で書いたら一文字も合わないけどな。」

「おまえ、地の文を読むなよ、一応僕の心の中つて設定なんだぞ。」

「気にするな。」

そんなこと言われても、なにか心の中を覗かれている感じがするから気にはするけどな。

「そつそつ望、一つ良い」と教えてやる。「なんだ一体?」「お前を押したのは俺だ。」

キメ顔で言われた。

「殺す。」

僕は即座に島屋の首を絞めた。

「タイム、タイム。ちょっとした出来心なんだよ、もしかしたらギヤルゲーみたいなことになるかなって思って。そしたら大成功!」「絶対に殺す。」

人を社会的に殺すのを躊躇わない人間は死ぬべきだ絶対に。「タイムって言つてるだら…。」

島屋は僕に首を絞められないと氣絶してしまった。

「ちっ、氣絶したか。死ねば良かつたのに。」

僕は仕方なく島屋の首から手を離し島屋の顔面に殴りかかった。「までまで、何をしようとしている?」

しかしそれは止められてしまった。

「いや寝てるから起こそうかと思つて。」

「ちっ、受け止められたか。」

「おーい、心の声が駄々漏れだぞ。」

「知らん、どうでもいい。」

「話はかわるがお前今、時間大丈夫なのか?」

「大丈夫に決まって…、ない!」

僕は時計を見て驚いた。「ヤバッ…、早く帰らないと。行くぞ島屋!」

とりあえず僕たちは駅まで走った。

「そう言えば珍しく望が女の子を見ていたよな。」

ムツ、その話を掘り起こすのか、島屋のせいで最悪の出会いになつたのに。まあいいか。

「そうだな、何でだらう?」

「ハハハ、一目惚れか?」

何でこいつは昔からの付き合いなのにわざと僕の言つて欲しくないことを言つのだらう?

だから僕はこいつ返事を返した。

「いや、それは無いな。」

「もうだつたな、スマン、スマンお前は他の子よりもあの時の約束のほうが大切だもんな。」

「まあな。」

そうだ、僕には約束がある。このちゃんが僕との約束を無効にしない限り僕は恋をしない。それが僕が喪失感を埋める唯一無二の手段だつたから。「そうだ、今日遊べるか望?」

「今日か…、別に大丈夫だ。できたら2時以降にしてくれ。今日は姉さんと妹に昼ごはんを作つてやらないといけないから。」

「わかつた、それじゃあ2時半ごろに行くよ。」「了解、家で待つてる。」

僕がそう言つと、

「宝山～、宝山～。」

とアナウンスが聞こえてきた。

「着いたな。」

「じゃあな、また後で。」

駅の出口で島屋と別れ帰路に着いた。

## 入学式が最悪の日になつた（後書き）

こんにちは、こんなものを読んで頂きありがとうございます。  
もう一つの作品から読んでいただいてる人はお世話になつてます。  
毎日がんばってあげてみます。  
では次話であえれば。

**妹が一人に感じる今日この頃。（前書き）**

「こんにちは、とりあえず一話です。」

## 妹が一人に感じる今日この頃。

「ただいま。」

僕が家のドアを開くと、「お帰り～お兄ちゃん。」

とつとつと、と軽快で小さな足音が近づいて来た。その足音の持ち主は僕の妹の高見（高見）結美（ゆみ）小学三年生の女の子だ。

「ただいま結美。」

「お帰り望。」

僕が結美の相手をしているともう一人話しかけてきた。

「ただいま、ねえさん。」

それは僕の姉の高見冷菜（れいな）僕と同じ学校に通っている先輩である。「遅かつたね、もしかしたら今日はお昼ご飯無しかと思ったよ。」

「ごめん、今からつくるよ。」

僕は急いでキッチンに向かう、ちなみにうちの家は母親が既に他界していてねえさんはまったく料理ができないため九割方僕がご飯を作っている。あとの一割は父さんと結美だ。

あ～あ何で料理と掃除はからつきし駄目なのにそれ以外の家事とか勉強とか運動は完璧なんだろう?

「で、何が食べたい？」

「ハンバーグ！」

「グラタン！」

「マジか…。」

なんでこの姉妹は手間のかかる料理を食べたがるんだ？

「ん?ちょっと待てよ…、たしか冷凍庫にハンバーグがあつたはず。」

冷凍庫をあさると想像通り冷凍してあつたハンバーグが出てきた。

「これでいいか結美？」

「いいよ～。」

「最近私の希望通りのメニューを作ってくれないよね、望？」

2日連続で希望通りのメニューを作らなかつたぐらいてそんなことを言わなければならんんだ?まあいい、ねえさんの機嫌もたまにはとらないと後が怖いし。

「最近掃除もしてくれないし。」

確かにここ3ヶ月は受験勉強で忙しかつたから掃除はできなかつた。おかげでねえさんの部屋はすごいことになつてゐみたいだけど。

「わかつた、今田の晩にねえさんの部屋の掃除をするよ。」

「ありがと、望。」

いきなりねえさんが抱きついてきた。弟が高一にもなつてその接し方はおかしいと思う。

「わかつたから早く離れて、じゃないとお匂い飯が作れないから。」

「わかつた望。」

しぶしぶねえさんは離してくれた、なんで僕と結美に対してもこんなに甘いんだ?いつもの人前で見せているクールな感じだけと樂に家で過ごせるんだけどな。

「さてぼやいていても仕方がない。さつわとお匂い飯を作るか。」

「結美ちゃん、春休みは楽しかった?」

「うん、楽しかった!」

僕が料理をしていくとねえさんと結美の話し声が聞こえた。うん、仲詰むまじいな。

「誰と遊んでたの?」

「アオイちゃんとかミホちゃんとかタカシ君とか!」

「タカシ君!…まさか…男の子?」

「うん!」

「ダメダメ男の子と遊んじゃダメ!私の可愛い結美ちゃんが穢されちゃう!」

ねえさんは結美に抱きついた。

「えつ、えつ?どうしたのお姉ちゃん?」

「こんなに可愛い結美ちゃんが穢されるのは嫌!」

ねえさんは叫んだ。

「やめんか。近所に迷惑だな。」のシステムー

僕ははねえさんの頭をお盆で軽く叩いた。

「止めないで望！私は今からタカシ君の家に行つてタカシ君を殺つてくる。」

「だからやめろって。」

僕はさつきより強めでねえさんの頭を叩いた。

「う～、望が反抗期になつたよ。。。」（ノヽヽ）

「顔文字で表現するな、後反抗期でも何でもいいから早くお昼ご飯を食べてくれ。」

僕はテーブルを指差した。

するとねえさんは頭をさすりながら、結美は走つてテーブルに向かつた。

「――『いただきます』」「

お昼ご飯を食べ始めるとなえさんがおもむろに、

「ねえ、同じ学校で好きな子いる？」

「はあ？」

驚いてうつかり茶碗を落としそうになつた。

「できるわけないだろ、今日が入学式だつたんだし、それに僕には約束だつてあるんだから。」

僕がそう言うとねえさんは、

「そつか、お姉ちゃんうつかりしてたよ。」  
と苦笑いしながら言つた。

「ねえお兄ちゃん。今日の晩ごはんは何？」

結美が空氣を読んだのか質問をしてきた。我ながら良くてできた妹だと思う。ねえさんと立場を逆にしてほしい。

「そうだな、今日はねえさんの食べたがつていたグラタンにでもするか。」  
「本当に…？ありがとう望ー。」  
「はいはい。」

そんな話をしているとお昼ご飯を食べ終わった。

「そろそろねえさん。どんなグラタンが食べたいの?」「ホワイトソースがたっぷり入っているのがいいな?」

「わかった、それにするよ。」

「やった!これはそろそろ禮でお礼をしないと。」

「えつ?」

急にねえさんは僕に抱きついてきた。

「ちょ、危ない!」

抱きつかれた反動で後ろに倒れてしまった。

「「ん?」」

「けた結果僕はねえさんに押し倒されたように見える結果になつた。

今日の入学式とはまったく逆だな。

でもちよつと待てよ、こんなに見られたらすぐさすがにヤバイんじやあ…。

「望…、しょつか?」

「何をするんですか!」

ねえさんはおもむろに上着を脱ぎ出しつとした。「まつてーまつてくれねえさん!」

「お邪魔しまーす。」

突如、僕の家のドアが開いたら

しまつた!島屋の奴もう来たのか!

ヤバイ、こんなに見られたら近親相姦と思われてしまう。

「「……。」」

島屋と田があつた。

「失礼しました。」

バタン、と家のドアが閉められた。

これで僕の人生はおしまいだ。最悪だ…。

妹が一人に感じる今日この頃。（後書き）

ここにちは、相変わらず書くのが大変なもの代わりにあげています。

では次話でまた会えれば。

できればもう一つ作品を書いているのでそれも読んでいたたけると嬉しいです。

島屋と遊ぶのは久し振りだな。（前書き）

短いです。すみません。

## 島屋と遊ぶのは久し振りだな。

そう思つてこると急に島屋の声が聞こえてきた。「もしもし、俺だ。望が遂に自分の姉に手を出したぞ。どうすればいいと思つ? やっぱり警察につき出すか?」

「今何か不吉なことが聞こえだぞ? 国家権力さんにつき出すとか何とか。」

「まつて…この状態から見て通報するべき人間は僕じゃなくてねえさんだろ!」

「なんで僕が通報されなきゃいけないんだ? 島屋の奴男女差別が酷すぎる! どうしよう、このままだと僕は警察のお世話をになってしまつ!」

僕や結美の学校生活に支障をきたしてしまつ、ねえさんはどうでもいいけど。

「はあ? 僕が誰だつて? いやいや俺は俺だよ。」「ん? 何か島屋の様子がおかしい。」

「そうそう、そうだよ兄さんだよ、それでさ~、一つ言つことがあるんだけど、いや、うん。生き別れて辛かつただらうけども、今金が必要なんだよ、50万。」

あれ、島屋に弟とか妹つていたつけ?

「はあ? 50万もない? それくらい用意しうよ。いつも困つてるんだよ。50万が無理なら40万でもいいから、な銀行に振り込んどけよ!」

「ちよつと待て!」

僕は頑張つてねえさんの拘束から抜け出し島屋を止めにかかった。

「え?」

島屋を見ると島屋の手にはケータイどころか何も持つていなかつた。

「フツ、騙されてやがる。俺がそんなことするはずがないだろ、し

かもお前のねえさんがパソコンでシステムなのも知っているからな。

「でも」「一年僕の家に来ていなかつたのこにくねえさんがわかつたな。」

「ねえさんは昔からきれいな顔をしていたが高校生になつてから何倍もきれいになつたらしい。

しかも、ねえさんが新年の挨拶回りで親戚数人から「誰?」と言われたらしい。

「それはだな、白崎の一年生以上の顔と名前は全員覚えているからなのか。一年生は今日入学だから知らないけどな。」

「そういえばこいつ性欲が常人の三倍はありそつて言られてたな、成る程納得した。

まあ、そんなことどうでもいいや、。

とりあえず僕は島屋を部屋に連れて行つた。

「そういえば何をするんだ? 僕の部屋には何も無いぞ?」

僕の部屋には本当に何もない、あるものと言えばテレビとHDD

ンと必要最低限の家具位しか無い。

「今日はこれをするんだよ!」

島屋はかばんの中からゲーム機を取り出した。

「これは…、P 4!?」 そんなバカな…、ijiまで薄型になつていたのか…。

しかもこれは初回限定版で販売初日で一万台売り切つて今やどこのゲーム屋に行っても買えないプレミア物じゃないか!

「一台15万はするぞ…。」

「そうだ、P 4だ。」

「これで何をするんだ?」

「モン ン3rdG」

「おお、遂に買ったのか。で、今どこまでクリアした?」

「もちろんG級全部終わつたぜ。」

「なんだと…? はや過ぎるだろ、手伝つてくれよ。」

「いいぜ。」

と言つわけで僕はかばんからPを取り出した。

「それじゃあ俺はテレビを使わしてもいいぜ。」

「了解。」

僕と島屋はモンンを始めた。

三時間位すると島屋が急に、「なあ、今朝のお前何かおかしくなかつたか?」と聞いてきた。

確かに言われて見ればそうだった。なんであの子を見つめていたんだろう?何でだろう?彼女のどこかに惹かれたか、もしくは…、いや、絶対にそれは無い!

「そうだな、僕にも分からぬいけどおかしかったのかも知れないな。」

「そうか。」

島屋がそう言つと僕たちはゲームを続けた。

たぶん島屋がここで話を切り上げたのは僕がこのちやんに罪悪感を思い出させ無いためなんだろう。いつもいろいろことばかり言つけど、こつはこいついい奴なんだよな。

「望、今日はそろそろ帰るよ。気づいたらこんな時間だしな。」

島屋の言つ通り時計の針は六時をさしていた。

「確かに、それなら家まで送つてやるよ。」

「いいよ、お前は一階にいる冷菜さんと結美ちゃんに晩ごはんを作つてやれよ。」

「わかつた、なら玄関まで送るよ。」

僕は島屋と玄関まで行った。

「じゃあな、また始業式で。同じクラスになることを祈つておく。」

そうだった、新年度になつたし学校が変わつたんだしクラス分けがあつたのをすっかり忘れていた。

「そうだな、僕も祈つておくよ。」

「じゃあな。」

「おう。」

僕は島屋に別れを告げてドアを閉めた。

そしてキッチンに行つてねえさんのお望み通りグラタンを食べてからねえさんの部屋を片付けて寝た。

朝以外は何もなかつた一日が過ぎた。

島屋と遊ぶのは久し振りだな。（後書き）

こんにちは、頑張つて毎日更新頑張つてますがそろそろきつくなつてきた人です。

これからも頑張つて毎日更新をしていきますが、あひごときや、今書いている所に追いついた場合は2日や3日に一回になります。すみません。

では、また次話で会えれば。

できれば、もう一つ作品があるのでそちらもよろしくお願ひします。

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能してください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n9215y/>

---

そんな出会いで恋をしたかった。

2011年11月30日21時48分発行